

防災に強いコミュニティを形成するための
地域社会の人的交流のあり方と課題
—市民の防災力向上に向けて その33—

正会員 ○ 小林真理子*1
正会員 平田 京子*2

防災 文京区 地域コミュニティ
共助 交流 防災訓練

§ 1 はじめに

東京が首都直下型地震に見舞われる危険性が指摘されるなか、震災を生き延びるための住民自らの対策が求められている。震災直後は消防・警察等による救助が期待できないことから、近隣住民の協力と助け合い、いわゆる共助が必要になる。さまざまな世代からなる地域住民が緊急時に共助体制をとれるかどうかは日頃の交流に影響を受けている。そこで地域住民の日常の交流状況と防災面での課題を、文京区を例にとって明らかにする。

§ 2 調査概要

防災コミュニティが発災時に機能するためには地域住民の日頃の交流が必要であるが、既存の交流組織の中心的存在である町会を取り上げ、町会ヒアリング調査から交流状況とその課題を明らかにする。次に住民交流ワークショップを実施し、防災コミュニティとして機能する町会のあり方、活動や防災面でも機能する地域社会の人的交流のあり方を探る。研究の流れを図1にまとめる。

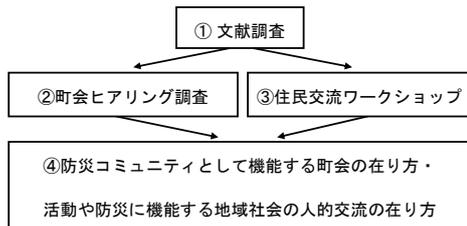


図1 研究方法

§ 3 町会ヒアリング調査における交流と防災面の課題

ヒアリング調査により町会の役割と現状を確認し、町会の抱える課題を明らかにする。2009年7月から12月までに文京区5町会(A~E)の町会長と文京区町会担当職員に調査を行った。交流や防災活動のあり方は地区構成の影響を受けるため、調査対象は表1の防災と、地区構成の2要素を考慮して選んだ。

表1 調査対象の選出要素

防災活動の 活発度	a. 防災活動が活発な町会(C・E町会) b. 防災活動に参加や協力が十分に得られない町会(A・B・D町会)
地区構成	c. 主にマンションで地区が構成されている町会(C・D・E町会) d. 主に一戸建てで地区が構成されている町会(A・B町会) e. 商店が多い町会(C町会)

住民の日常の交流や防災活動についての問題点と特徴、マンションや商店といった地区構成による問題点や特徴について質問した。各町会では抱える課題が異なるが、

表2のようにまとめられる。これらから5点が文京区の町会に共通している課題であることがわかった(表3)。

表3 文京区の町会に共通している課題

① 高齢化	・若い世代(学生~40代)の会員が少なく世代交代が遅れている(B町会) ・町会に加入する必要性を感じない人が増えてきている(B町会)
② マンションの住人が加入しない	・オートロックに阻まれ、新規住人を勧誘できない(A・B町会) ・賃貸型マンションの住人は短期間で転居してしまうため、交流しようとしにくい(A町会)
③ 町会そのものが任意団体であることが運用を難しくしている	・マンションディベロッパーが町会に関する付帯事項を嫌がり、町会に加入することを許可しないケースがある(A町会) ・個人情報保護法を理由に町会名簿が作りづらい(B・D町会)
④ 共助意識が育っていない	・町会は無報酬であるということから敬遠されがち(B町会) ・仕事が忙しく町会活動で時間を犠牲にしたいという理由で参加しない(B町会)
⑤ 町会において防災活動がうまく機能していない	・お祭りなど楽しい行事には人が集まるが、防災訓練は参加者が増えない(A・B・D町会) ・大震災に対し現実味が湧かないため参加意欲がおきない(A町会) ・コミュニティ機能を支える立場での目的意識が低い(B町会)

さらに表3の課題を解決する方法として2点が確認できた。①~④については高齢化が進んでいる町会と様々な地域住民(若い世代やマンション住人等)の交流が必要であり、「日常の交流の工夫」が①~④の課題解決につながる。⑤については、防災コミュニティとして十分に機能できる町会に改善するために「防災訓練に何らかの要素を付加すること」が必要であり、防災訓練での交流の仕方や防災訓練の内容を工夫することが解決策の1つになる。

§ 4 住民交流ワークショップの目的と結果

町会会員側の意見を明らかにするため2009年10月17日・18日に17歳~80歳代の男性11人・女性16人の計27人を対象とし、交流の必要性・町会の位置づけについての啓発と交流および意見聴取を目的にワークショップを実施した(図2)。

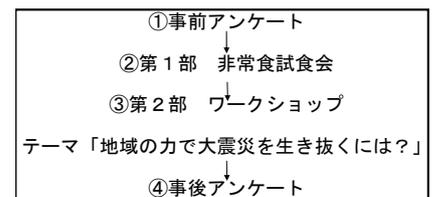


図2 ワークショップの流れ

ワークショップで出された意見では、大震災を生き抜くには自助だけでなく共助が大切であり、日頃から地域の人と知り合いつながっておくための交流と、日頃の備えとして防災の知識やスキル・協力や行動の仕方などを身につけるための防災の両面が必要と考える人が多い。

日常の交流面では、顔の見える活動を積み重ねられる町会を基盤とした交流が最も望ましいとしながらも、「町会の仕事が負担となる、参加のきっかけがない」等のハードルを感じており、参加しやすい町会となるよう工夫を

表2 防災訓練と交流面からみた各町会の特徴

	A町会	B町会	C町会	D町会	E町会
防災におけるよい点・工夫	・地区班を作り、班長がうまく把握している ・若い人も防災に関心が高い ・消防団に入る等行動を起こしている	・少年消防団があり、30人程加入している ・制服におこがれて入る子どもが多い	・合同防災訓練の参加率は70%防災訓練で世代間交流も図れている ・町会内に防災団を組織。体制が整い共助意識が育っていると言え ・「放水訓練兼ドジョウ掘み」など楽しい体験型の実践的な訓練が人気	・住宅地住民20人以下が対象の訓練は、実践的内容と子どもたちへのご褒美など工夫が多く参加率もよい ・リーダーシップは、町会長・防災部長・防災リーダーがとる ・実践的な訓練や楽しい訓練が人気	・マンションの訓練は実際に避難場所になる公園での防災訓練を兼ねている。そのため、マンション住人は訓練参加者が各マンションで集合してから公園に移動する ・マンション一棟ごとに担当係を設け、必ず4～5人は訓練に出すようにしている ・吹き出しを美味しくする工夫をしている
防災上の問題点	・町会員は防災訓練に積極的に参加する者が少ない ・若い人は二極化している ・若い人は機会を作っても現実味が湧かない行動を起こさない	・避難所訓練は、町会役員でさえ行政任せな者がある ・防災訓練の意識が低い。関心のある人や町会役員しか参加しない	・避難場所は各小学校と決められているが、小学校は一時避難場所にはなっても生活の場にはならない ・防災に興味の無い人や人との触れ合いが苦手な人を参加させるのは難しい	・防災訓練に参加しない理由は「目的意識を持って参加しよう」としない。関心がない。住民の交流の場にならない。 ・区で要請しないと訓練に人が集まらない ・災害弱者を助けるための名簿作成が難しい	
日常の交流におけるよい点・工夫	・防災活動「スクールガード」で、町会と地域の親子が交流 ・日常のコミュニケーション（声かけ）他、冠婚葬祭のお手伝いやお神輿の引き手家の生活に介入	・お祭りやラジオ体操は後でご褒美や紙芝居があるので小学生の参加者が多い。80人程集まる	・人気のある「クリーンデイ」は、清掃目的のコミュニケーション目的で活動 ・下町祭りやふれあい館祭りは、町会役員が主に出店。趣味の会関係の学生の出店もある ・「声かけ運動」を自発的に行い、マンション住民の顔までわかるほど	・商店街でチャリティの盆踊り大会を行う。町会自体の交流の場はお祭り等。子どもが山車やお神輿でまわりお菓子を配る ・ラジオ体操は子どもや親子の参加が多い ・火の用心は子どもが大人の手をまわっている ・公園は役員が毎日朝晩清掃。安全な公園は母親たちや町会員の交流の場になる	・町会長がマンション理事長をやっていた経験から、マンションと地域を結びつける工夫をしている。町会長自らアピールする ・マンションに住んでいる町会員がまず自分のマンションに声をかける。すると同じ世代同士で声かけし合いロコミが広まり行事の参加者が増える ・お祭りの運営側として若い世代の協力を得られている
日常の交流における問題点	・マンションの町会加入促進が大きな問題。事業所は町会に会社で加入しているが、居住者がいないため人的貢献がない	・若者は忙しく、無報酬である町会を敬遠。高齢化が進んでいる ・地域住民の交流も不活発	・役員の二世三世が多く、一家で役員を引き受けている家庭が多いので、負担が集中しがち	・役員の交代がうまくいっていない ・40～50代は動いていても役員をできないため集まりにくい	・町会役員が10人程しかおらずしかも勤めている人が多いので、1人の負担が大きい
地区の特徴・加入	・マンション少ない。個人住宅1/2集合住宅1/2。核家族と事業所多い。居住者の約8割が町会に加入。町会役員(60代中心)の商店主の子供を中心に青年部が活性化		・マンションと核家族と商店多い。ほとんどの住民が町会に加入。正会員と準会員に分けている。役員の二世三世が多いが、一家に町会の仕事の負担が集中する問題あり	・マンションが多く、高齢者夫婦の二人暮らしが多い。山の手のお屋敷数町。地域に住み続けている人の95%は加入 ・マンション住人勧誘の工夫が成果を上げる	・マンションが半分を占めていて、お年寄りも多い。しかしお年寄りの一人暮らしは少ない。若い人も町会に加入 ・典型的な住宅街 ・新規マンションが増えて子どもが多くなってきたため行事の参加者が増えている
勧誘の仕方	・お祭りなどの行事でアピールをする ・新しい町会員に企画を任せさせる		・若い人が参加しやすい行事に力を入れ楽しめたいと思わせる工夫をする	・行事に参加してもらい、町会に親しませる ・お祝い金を出す(敬老・成人・小学校入学)	・マンションに新規住人が入ると、マンションが地域に溶け込むことの難しさや大切さ・町会費の使い道について町会長自らアピールする

方策が必要である。さらに町会の解決すべき課題として高齢化、マンションの住人が参加しない、町会そのものが任意団体であることが運用をむづかしくしている、共助意識が育っていない、町会において防災活動がうまく機能していないという5点があげられる。また、防災訓練に何らかの要素を付加するという防災面では、スキルアップ・知識が身につく、現実性、共助訓練、交流の要素の付加、子どもの参加、楽しい要素の付加の6点が重要である。

これらの各々の要素に力を入れている町会は防災訓練に住民が参加していることがヒアリングからわかった。C町会の例では、「分譲マンションが多いという地域特性を生かし、正会員と準会員に分けて勧誘する、商店会と町会のつながりが深く商店主の町会役員が多い、清掃活動や声かけ運動によりマンション住人も日常的に交流、跡継ぎが

求める声が多い。

防災面では「時間を費やす防災訓練には積極的に参加する意欲が起きない」という意見が多く、参加につながるような防災訓練の工夫を求める声が聞かれた。

§5 地域防災コミュニティの強化のための課題と方策

町会ヒアリング調査およびワークショップの結果から導き出された地域の力を強化する方法には、図3のように地域の特性を生かす、日頃の交流組織としての町会のよさを生かす、町会の課題を解決するという交流面での

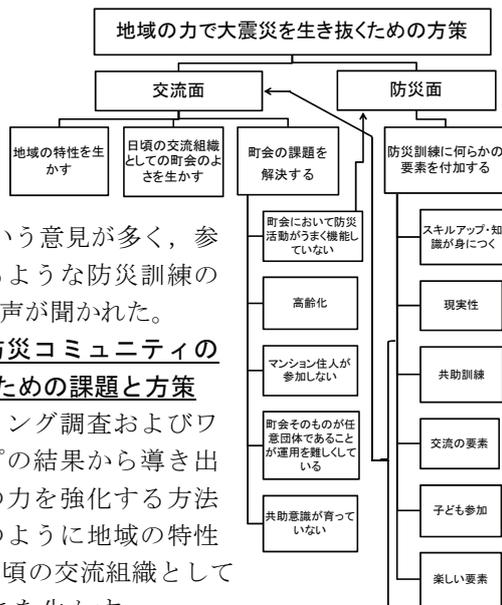


図3 防災コミュニティ強化につながるための主要な方策

多く共助意識が育って世代交代がスムーズ、防災訓練内容の工夫がある」等が、実際に各要素につながっている。

さらにC町会は訓練にプラスアルファとなる要素があることから参加者が多く、活性化している。放水訓練兼ドジョウ掘み・体験型の実践的な大型訓練と小さい単位での自主的な訓練の併用などにより、子どもの参加、楽しい要素の付加、交流の要素の付加、現実性、スキルアップ、共助訓練等の要素が備わっていることが、多くの住民の防災訓練参加につながっている。反面、B町会は交流面においても防災面においても図3の方策における交流活性化が生み出せず、問題を抱えていることがわかった。今後これらの要素を視野に入れて交流面・防災面の工夫をしていくことが課題だと思われる。

§6 おわりに

地域交流を防災面と日頃の交流から調査し、町会等が防災に強いコミュニティとなるための日常交流を増やす工夫と、共助型の訓練を取り入れて交流と防災の両面を活性化させていくことの重要性を明らかにした。

【謝辞】 ヒアリング調査および住民ワークショップに協力戴いた文京区職員・町会・住民の皆様へ深謝する。

*1 財団法人 ベターリビング
*2 日本女子大学住居学科 准教授・博士 (学術)

*1 The Center for Better Living
*2 Assoc. Prof., Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., Ph.D.